

# より効果的な国際交流のために

— 日頃の教育活動のなかでできることを考える —

千葉県立長生高等学校 教諭 遠藤 明子

## 1 はじめに

本校では国際交流に力を入れており、海外派遣の際は英語でプレゼンテーションを行うことになっている。本校の英語の授業では、生徒が自分でしっかり考え、表現する機会を多く設けるとともに、生徒の英語による言語活動の時間を確保することも意識している。今回のマレーシア派遣でもプレゼンテーションの機会があり、生徒達は十分準備をして取り組み、見事に発表していたように思われる。しかし、国際交流、異文化理解への取り組みのなかでプレゼンテーションのために準備をすることが中心となってしまうのではないだろうかという疑問がわいた。プレゼンテーションのように準備をしていけるものに対する取り組みだけではなく、バディやホストファミリーと過ごしたり、現地での活動の中で、授業での活動はどう生かされているのか、お互いに交流を深めたり、理解を深めるために学校生活の中で生かせることはないのかについて、生徒の様子を観察したうえで学習活動に反映できる方法を探りたいと考えた。

## 2 国際教育とは何か

そもそも国際教育とはどういうことだろうか。

千葉県の『新 みんなで取り組む「教育立県ちば」プラン』には「多様な文化を認め合う国際社会」という言葉が使われている。この「多様な文化を認め合う」ことができるような生徒を育成することこそ、教師として我々が目指すべき国際理解教育、延いては国際教育につながるものなのではないかと考える。

また、グローバル化が進む社会において国際理解や国際協力等に関する様々な方針や施策があるが、それらに共通していえることは1人1人が国際社会の一員であることを自覚し、異なるバックボーンを持つ人々とどう暮らしていくかということであるように思われる。自国の文化を理解、尊重できてこそ、多様な文化を認めることができるようになる。また、そうできなければ国際社会の一員とはいえないであろう。海外派遣などの国際交流は、国際社会の一員として自覚を持つ人材の育成につながるはずである。国際教育とは最終的に1人1人が自覚を持って社会で振る舞っていけるように手助けをしていくことともいえるのではないだろうか。

## 3 生徒の意識

海外派遣を希望している生徒達は何を目的として海外に行こうとしているの

か、そのために何か特別な準備をしているのか等について本校の生徒対象に事前および事後、2回のアンケート調査および聞き取りを行った。

※実際に使用したアンケート用紙

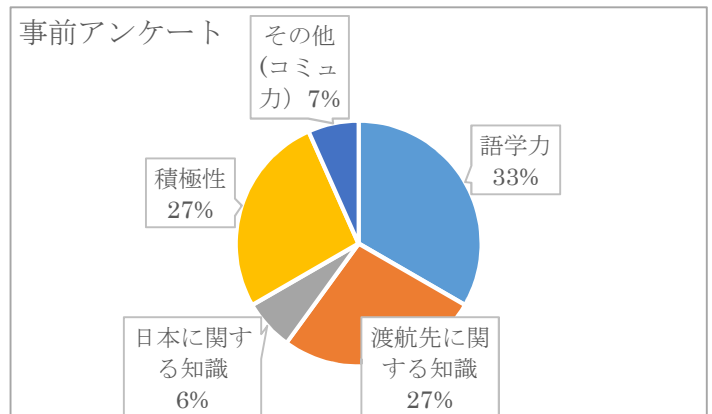
<p>事前アンケート</p> <p>1 海外派遣と聞いて真っ先に思いつく国はどこですか。 _____</p> <p>2 国際交流に必要なものは何だと思いますか。優先する順に1から3まで下から選び記入して下さい。</p> <p>_____</p> <p>1) 語学力    f) 渡航先に関する知識    g) 日本に関する知識 e) 積極性    h) その他(具体的に書いて下さい)</p> <p>3 マレーシア派遣の事前準備として重視していることは何ですか。</p> <p>4 マレーシア派遣でどのようなことを学びたいと考えていますか。</p>	<p>事後アンケート</p> <p>1 国際交流に必要なものは何だと思いますか。優先する順に1から3まで下から選び記入して下さい。</p> <p>_____</p> <p>1) 語学力    f) 渡航先に関する知識    g) 日本に関する知識 e) 積極性    h) その他(具体的に書いて下さい)</p> <p>2 上記の優先順位は派遣前と変わりましたか? はい いいえ +○をつけてください。 はい の人は理由を書いてください</p> <p>3 マレーシア派遣の事前準備としてやっておけばよかったと後悔していることはありますか。 あるとしたら、それはどんなことですか。</p> <p>4 マレーシア派遣でどのようなことを学びましたか。</p> <p>5 長生高校の英語の授業でやっていることで今回役に立ったことはありますか。(具体的に)</p> <p>6 英語の授業でこういうことをやってくればよかったのにも思うことはありますか。(具体的に)</p> <p>7 英語以外の授業で役立ったこと、やっておけばよかったことがあれば記入してください。</p>
--	--

事前アンケートで海外派遣と聞いて思い浮かぶ国を聞いたところ、「アメリカ」、「オーストラリア」という英語圏の国を答えていた。また、今回の海外派遣に応募した理由は「英語に興味がある」、「英語を使って実際にコミュニケーションしてみたい」等、英語が主たる目的となっていた。それを裏付けるかのようにアンケートによると、派遣で学びたいことは、まず「英語力」、次に「日本とは異なる文化に直接触れ、今後に生かしたい」というものであった。

事前準備で重視していることは、ほぼ全員が異口同音にマレーシアの文化について学ぶことをあげていた。その他としてはコミュニケーション力をあげた生徒がいる。

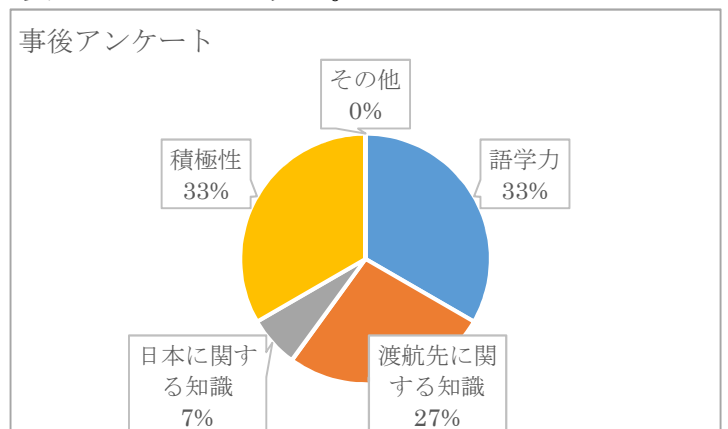
生徒達は海外と聞くと英語を思い浮かべるようだ。

さらに、アンケートでは国際交流に必要なと思うものを優先順位の高い順に選んでもらった。まず、事前アンケートの結果をみると、上位3つは1位から順に「語学力」、「積極性」、「渡航先に関する知識」となっていた。この背景にはやはり、英語ができないといけないという思いがあると推察される。



では、事後アンケートではこの結果は変わったのだろうか。

右は事後アンケートでの、国際交流に必要なものの結果である。上位3つの要素は変化なしだが、順位には変動があった。全員が1位「積極性」、2位「語学力」であった。



理由として、全員が異口同音に、「積極性があればジェスチャー等を交えながらコミュニケーションが取れると分かったから」と答えている。

さらに事前準備でやっておくべきだったと後悔していることの中に、英語の語彙をもっと増やすべきだったということに加え、マレー語で挨拶等をできるようにしておくべきだったという記述があった。マレーシアの文化について学ぶことを事前準備としてあげていたものの、訪問して初めて、訪問先のことをもっと理解しておくべきだったという気持ちを持つようになったのだと推察できる。ジェスチャー混じりの英語でも楽しく過ごせたからこそ、挨拶ぐらい現地の言葉で交わしたかったという気持ちになったのだろう。そしてそれはマレーシアの文化を受け入れようとしている態度の一つとして受け取ってもらえるのではないだろうか。

#### 4 派遣中の生徒達の様子から

今回の派遣期間中、生徒達はどのように過ごし、多少なりとも意識の変化を生んだのだろうか。

セラランゴール州教育機関では現地の方々の親しみやすさも有り、短い時間で

はあったが英語、日本語混じりで多くの質問をするなど、積極的に交流できたと思う。学校交流では、バディの生徒達が積極的に他の生徒との仲を取り持ってくれたようで、楽しく交流していた。カンポンステイやB&Sプログラムでも、やはり積極的に交流する姿が見られた。一方、バトゥ洞窟、モスク、マラッカ市内見学など観光の際は、日本人同士での会話に夢中になっている姿が見られた。特に、モスクでは、おおむね静かに見学できていたものの、時々会話に夢中になってしまう姿が見受けられ、それが気になった。また、バス移動が多かったため、現地の人々と交流する時間は思ったより少なかったようだ。

生徒の様子やその後の会話の内容から気づいたことは、現地の方々との時間を長く持てれば、より積極的に交流していたであろうということだ。生徒達にとって国際交流イコール英語を使うというイメージがあり、最初はうまく話せないと尻込みする様子も見られた。しかし、英語が母国語ではない者同士、コミュニケーションを取るうちに楽しく交流するようになっていった。だからこそ、楽しくて、限られた時間で残念だと思った生徒が多かったように思われる。生徒達は英語を使うことに対して前向きだということはいかがい知れた。

しかし、いくら事前研修で宗教や文化習慣の違いを学習しても、身についてないと思われることが多かった。特に気になったのは前述のモスクでの振る舞いである。付け焼き刃の注意では定着しない。これには日頃からの意識を持たせる指導が関係していると思われた。

これら生徒達の様子と、事後アンケートで調査した以下の項目から日頃の授業を振り返ってみた。

<事後アンケートから>

・派遣で学べたこと

積極的にコミュニケーションすることの大切さ  
文化の違いを受け入れること

<普段のコミュニケーション英語の授業で役立ったこと>

毎授業、最初に行うペアでの会話

自分の考えを言わなくてはいけないこと

All English の授業で英語の音に慣れていったこと

<普段の授業でやってほしいこと>

英語を話す練習

本校の英語の授業では、ワークシートだけではなく、授業の進め方もほぼ共通で、担当者によって差の出ない授業を心がけている。したがって日頃同じような活動をしているわけだが、生徒によって受け止め方が異なることが分かる。ペアでお互いに意見交換をすることは毎回行っていることだが、これが役立つ

たという意見をみると今後も取り入れていく必要があるものだと判断できる。

しかし、英語で話す練習をしたいという意見があるということは、英語で話す時間をうまく使えていないのではないかと考える。本校の生徒は自分の考えを求められると、まず、書こうとする。しかも、正確性にこだわるので時間がかかり、実際に話す時間がなくなっている生徒が出ているのだと考えられる。実際の場面では黙ってしまったらコミュニケーションは成立しない。

今回、生徒達は、積極的にコミュニケーション取ろうとすれば伝わるということをもっと体験したと述べている。だからこそ、もっと話す練習をしておいて、たくさんコミュニケーションを取りたかったのかもしれない。

## 5 日頃の教育活動の中でできること

まず、効果的な国際交流というのは、どういうことなのか改めて考えてみたい。先に述べたように、学校現場での国際教育とは、多様な文化を認め合うことができるような生徒を育成することだと考える。そうだとすると効果的な国際交流というのは、派遣事業などの行事を、そのとき限りのものとするのではなく、交流を含む国際理解について継続的に考えて、関わっていくことを手助けするものではないだろうか。

そこで、英語科の教員として、現在の勤務校の授業の中で何をすればより効果的な国際交流につながるか考えてみた。

まず、授業中の活動については、おおむね現状維持で対応できていると考える。しかし、我々職員は慣れていても、生徒にとっては初めてのことという認識を忘れてはならない。そこで、それぞれの言語活動に注意点を考えてみた。

### ・ペアワーク

単にルーティーンとしてのウォームアップ的なものは、生徒にとって英語を使っているという認識にさえならないことがあることを考えるべきである。また、話すことを目的としたペアワークでは実際に会話している場面を念頭に置くと、素早いレスポンスや会話を途切れさせないことを意識しなくてはならないと考える。さらに言えば、ペアワークの際はGG(グルグル)メソッド等で様々な生徒同士で会話を続けられるようにすると英語で話している感覚は得られると思う。

### ・グループワーク

何のためのグループワークか、目的をはっきりさせることが大切である。ブレインストーミングなのか、意見交換としてのグループワークなのか、結論を求めるディスカッションなのか、じっくり考えることを要求するならば会話は少なくなるだろう。とにかく話をさせることが主たる目的ならば生徒への指示の仕方を変えていかななくてはいけない。果たして、授業中、常にそれを心がけているだろうか。

さらに、生徒達がプレゼンテーションを行う際に、英語面だけではなく、プ

プレゼンテーションの仕方をきちんと指導する必要がある。プレゼンテーションを行う対象、目的、テーマに応じたより効果的な方法というものを指導していくと、生徒の抵抗も薄れるだろう。実際、今回も事前研修でそれらを学んだ後では、生徒達がさらに積極的にプレゼンテーションに取り組むようになっていた。プレゼンテーションに関する取組みは英語の授業以外でも必要である。

それぞれの活動の目的と、これがどのように役立っていくのかを生徒にその都度示して行くことが大切だと考える。なぜなら、生徒達が使っている言葉も英語で、それで十分コミュニケーションを取れるはずだが、別のものとして捉えている生徒が多いからだ。さらに、この先英語を使ってやりとりしていくのは必ずしも英語ネイティブではないということを知ることが必要だと思う。今回、マレーシアを訪問した生徒達は英語を母語としない者同士の英語によるコミュニケーションを実践してきた。グローバル社会の一員として、これからそのような場面には数多く遭遇するだろう。

幸い、本校では受け入れも多く、本年度は中国からとアメリカ、オーストラリアからの生徒を受け入れた。また、9月より長期留学生としてノルウェーからの生徒を受け入れている。オーストラリアからの生徒はアジア系の生徒が多く、「自分は英語圏出身で英語ネイティブです。」という留学生は少ない。その現実をしっかりと認識できるように、受け入れの際もなるべく多くの生徒と交流できる方法を考えていかななくてはならない。

さらに、生徒のアンケートからはあがってこなかったが、自国の文化か異文化かということをおろそかにせず、文化に対する意識というのは重要であると思う。私自身は修学旅行の引率で何度か、例えば、原爆ドームやひめゆりの塔を訪れているが、見学の生徒達はしっかりと見学していたかと問われると、必ずしも全員がそうではなかった。自国の歴史に向き合うこと、過去に起こった出来事をきちんと理解すること、これができなければ他の文化を尊重できないのではないかとされる。そのような理由から、残念ながらモスクでの振る舞いが若干気になる生徒がいたのではないかと考える。学校生活や家庭生活を通して、全員が身につけていくべき姿勢だと考える。

## 6 おわりに

国際理解教育、国際交流、異文化理解ということを見ると、より効果的な国際交流とは、一過性のものではなく継続していくべきものだといえる。私は英語教師として、授業の中で、とにかく生徒が英語を使う時間を確保し、英語で話をさせることが大切なのだと考える。現任校の職員としては、派遣や受け入れを日常の学校生活に組み込むことが大切である。受け入れを一部のクラスや一部の生徒との関わりで済ますのではなく、なるべく多くの生徒が関わる場面を設定し、単なるイベントで終わらせないことが大事である。

また、学校全体としても、イベントで終わらせない体制を考えていかなくて

はならないと考える。生徒達の意識作りの面で教科に関係なく関わっていく方法を考える必要があると思う。

今回、マレーシア派遣に参加した生徒達が持ち帰った「積極的にコミュニケーションを取ろうとすることが大切」という意識を保っていけるような環境作りができれば、その意識が他の生徒にも波及していくと信じている。

最後に、このような機会を与えていただき大変感謝している。この派遣で得たもの、感じたことを今後の教育活動に生かしていきたい。

---

【参考文献（資料）】

- ・「文部科学白書 2016」
- ・『新 みんなで取り組む「教育立県ちば」プラン』（平成 27 年 3 月）